

集落支援員

実践の肝

～第一線で活躍する自治体職員・支援員のための実践事例集～

1.目次・はじめに

「集落支援員実践の肝」目次

はじめに	P2
集落支援員制度の概要と実態	P3
活動内容実例	P4-5
①出雲市 ②雲南市 ③益田市 ④美郷町 ⑤海士町	
支援員向けのページ	P6-15
①集落支援員のミッション (p6-7)	
②集落支援員の属性と活動のあり方 (p8-10)	
③地区の課題の発見と解決 (p11-14)	
④苦労したことと乗り越え方 (p15)	
自治体職員向けのページ (集落支援の制度設計)	P16-18
これから支援員になる人へ	P19-21

1. はじめに

集落支援員の制度が平成20年度に創設されてから、平成26年度で7年目となりました。制度創設以来、年々導入自治体数・支援員数とも増加を続けており、平成25年度には「専任の」集落支援員だけでも741人が、「兼任」では3764名が活動しています。

地域の実情に応じて支援員の担い手や活動内容は多様で、「集落支援員」と言っても一口ではとらえにくく、そのため、他地区の事例を参考にしづらい面があります。現場では、支援員の皆さんそれぞれが試行錯誤をしながら活動を進めていますが、今後、集落対策をより一層円滑に進めるためには、事業の設計・運用について類似する事例ごとに整理し、共有していく必要があると考えました。

そこで、本書では、島根県内の集落支援員の事例について、様々なタイプを選び聞き取り調査を行い、今後、集落支援に取り組む方々のため、参考にできる資料としてまとめました。

集落支援員として現場の第一線で働く方や、支援員とともに集落対策に取り組む自治体職員の方に、本書をご活用頂ければと考えています。

2. 集落支援員制度の概要と実態

2. 集落支援員制度の概要

平成20年8月の総務省通知「過疎地域等における集落対策の推進について」では、「集落の住民が集落の問題を自らの課題としてとらえ、市町村がこれに十分な目配りをしたうえで施策を実施していく」方策として、集落支援員の制度が定められています。

事業に要する経費は、各地方自治体で予算化されたうえで、活動費・報償費が翌年度に特別交付税として財政措置される仕組みになっています。特別交付税による財政措置額は集落支援員1人あたり350万円が上限ですが、自治会長などを兼務する場合（兼任）は1人当たり40万円とされています。

地域おこし協力隊とは異なり、期間（任期）が定められていないこと、地域の実情に詳しい人材の採用を念頭に置いているため地域要件が定められていないことが特徴です。

集落支援員像は「地域の実情に詳しく、集落対策の推進に関してノウハウ・知見を有した人材」とされています。また、活動内容は「市町村職員と連携し、集落への「目配り」として集落の巡回、状況把握等を実施」とされています。この「集落への目配り」は、「集落の状況把握、集落点検の実施、話し合いの促進、集落支援に関する活動」とされており、特別交付税措置の対象経費は、当初は集落点検実施経費、話し合いの実施経費等とされていました。しかし、平成25年度の制度改正からは、「点検・話し合いを通じて必要と認められる施策に要する経費」として、地域おこしに資する取り組みに要する経費が計上可能となりました。集落支援員制度を用いた地域おこしの活動の幅がより一層広がったと言えるでしょう。

※制度の詳細については、総務省ホームページをご覧ください。

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/cgyousei/bunken_kaikaku/02gyousei08_03000070.html

3. 集落支援員制度運用の実態

集落支援員の勤務時間や報酬、任期などは、自治体によって異なります。週5日の常勤の方もいれば、月数日程度の方も。任期は事業期間が定められていて、その期間内で毎年更新する形が多いようですが、様々です。

また、公民館職員等の兼務の形をとる場合もあれば、公民館等とは一線を引いて集落支援のみの活動を独自に行う場合もあります。

集落支援員の人材像は、総務省の通知には「地域の実情に詳しく、集落対策の推進に関してノウハウ・知見を有した人材」が示されていますが、地域外の人材を採用する場合も見られます。支援員の年代ももちろん様々です。支援員の出身地がどこか、それまでどのような仕事をしてきたのか、地域でどのような役割を持っているのかなど、支援員の属性によっても、その後の活動の在り方が変わってきているようです。

以下では、こうした集落支援員の実像に迫ります。

3.活動内容実例

この冊子作成にあたり、各市町で活躍する様々な経歴・年代の方々取材させて頂きました。取材した5市町の制度と、21人の支援員の皆様の活動の概要を紹介します。

※本冊子の掲載内容は、平成26年度当時のものです。

出雲市

地域運営の方針

小学校区程度を範囲とする65の地域自治組織を中心とした地域運営を行っている。地区ごと43コミュニティセンターがあり、地域の総合的な市民活動の拠点となっている。

集落支援員の概要

開始年	H22年度	人数(平成26年度)	5人
ミッション・特徴	限界集落を含む地区で、過疎・高齢化の課題を解決するためのモデル事業として5地区に各1名配置されている。市の「集落応援隊(過疎高齢化集落の環境整備などの活動に対するボランティア派遣事業)」の調整役なども行う。		

支援員Aさん

60代男性、地区出身、元役場職員、農業委員・土木委員等。地区の若手でプロジェクトチームを発足し、地域づくり活動を推進

支援員Bさん

60代男性、地区出身、農業・集落営農役員、自治振興協議会会長ほか複数の役を兼務。地区の将来を語る会を毎年1回開催

支援員Cさん

60代男性、地区出身、元地区振興協議会会長、現在も地区社協など複数の役を兼務

支援員Dさん

60代男性、地区出身(Uターン)、単位自治会の自治会長を経験。有害鳥獣対策や、地域の困りごとを聞いて調整役として働く

支援員Eさん

70代男性、地区出身(Uターン)、町内会長他複数の役を兼務。地域づくりグループ会長としての活動と兼ねる。

雲南市

地域運営の方針

旧公民館区や小学校区等を単位として多様な団体により構成された42の地域自主組織(平成27年3月からは30組織)により地域運営を行っている。公民館を交流センターに改組し、地域自主組織の活動拠点としている。

集落支援員の概要

開始年	H17年度(*)	人数(平成26年度)	29人
ミッション・特徴	各自主組織の判断で1~数名配置されている。地域活動の企画立案・地区計画の策定や実施の支援等を行う。 (※)当初は「地域マネージャー」として配置。		

支援員Aさん

60代男性、地区出身(Uターン)、事業所の横のつながりを目的とした協議会を立ち上げ運営。

支援員Bさん

30代女性、地区出身、加茂に14ある地域自主組織を1つに再編するための支援。

支援員Cさん

60代男性、地区出身、元県庁職員、交流センターと一体となった行事運営や情報発信。

支援員Dさん

30代女性、地区出身、元交流センター事務員、地区の広報誌作成を担当

支援員Eさん

60代男性、地区出身、元連合自治会長、振興会の専門部会と専門委員会の補助

益田市

地域運営の方針

地域住民による主体的で特色のある地域づくり活動を支援し、地域住民と行政との協働による地域づくりを推進している。住民自治の確立を図る拠点として20の地区振興センター(旧公民館)が設置されている。地区振興センターを拠点とし、地域運営及び地域課題の解決に向けた取組みを主体的に行う新たなコミュニティ(地域自治組織)の創設を進めている。

集落支援員の概要

開始年	H 20年度 ^(*) ※各公民館区単位で専任の支援員を置くのは平成23年度から	人数(平成26年度)	17人 ※地域魅力化隊員としての人数
ミッション・特徴	集落支援員(地域魅力化応援隊員)は、地域自治組織の設立と定住人口の増加をミッションとする。各地区に1名配置。		



支援員Aさん

50代男性、地区出身、本業は地元の神社の宮司。各種団体の補助金事業支援、地域自主組織設立支援等



支援員Bさん

40代男性、地区外出身・在住。民間企業勤務などを経験後、2地区の支援員を歴任。地区の情報発信等



支援員Cさん

60代男性、地区出身、自治会長・児童館館長などを経験。「歴史を活かしたまちづくり」をテーマにイベント実施等

美郷町

地域運営の方針

町内全域を一定のまとまりのある13の地区に分け、自治会や多様な団体からなる連合自治会を組織し、地域運営を進めている。

集落支援員の概要

開始年	H21年度 ^(*)	人数(平成26年度)	14人
ミッション・特徴	連合自治会の活動推進役となり、活動を軌道に乗せていく。支援員同士の相談、連携で、各地域の活動、情報を他の地域に波及させていく。		



支援員Aさん

60代男性、地区出身、連合自治会事務局長を経験。現在は連合自治会長を兼務。住民と行政の調整役、連合自治会組織の見直し、避難訓練の実施など



支援員Bさん

60代男性、地区出身、元役場職員、連合自治会の事務局長を長年務め、現在も兼務。自治会や各種組織の事務

海士町

地域運営の方針

町内14地区の自治会が中心となって地域運営を行っている。

集落支援員の概要

開始年	H23年度 ^(*)	人数(平成26年度)	10人
ミッション・特徴	支援要望のある地区や緊急度の高い地区に対する人的支援を行っている。常勤・非常勤の両方、Uターン者と地元出身者の両方の支援員がいる。1地区1名の固定配置ではなく、支援員9名は教育委員会に所属し、担当地区を持ちながらも連携して活動している。		



支援員Aさん

30代女性、地区出身、Uターン保々見地区の担当として活動



支援員Bさん

30代女性、地区出身、当初は週1日程度の勤務、現在は崎・東・保々見地区を担当



支援員Cさん

30代女性、愛媛県出身、豊田・多井地区を担当



支援員Dさん

20代男性、地区出身、コミュニティ施設「あまマーレ」に常駐。古道具屋運営やイベント企画実施等。それ以前は各地区に幅広く関わる



支援員Eさん

40代女性、神奈川県出身、着任前は役場の臨時職員、活動終盤の地区を主に担当、リーダーとして全体を見る役割も担う



支援員Fさん

20代男性、大阪府出身、着任前は大学生、豊田・多井地区の担当

4. 集落支援員のミッション

集落支援員の活動は何を目指して行ったら良いのでしょうか。ここでは、各自治体が提示する大枠のミッションを踏まえて、地域の実情に合わせて支援員の方々がどのようなミッションを見出しているか、各支援員のコメントから整理しました。

出雲市

市としてのミッション

過疎・高齢化が特に進んだ集落の課題解決

上記を踏まえて支援員ご自身が意識していること

住民からの相談に、行政と相談して色々な情報を収集してその情報を提供するのが役割。

最低限やらなければいけない集落支援員の仕事は、地域の実態を知って地域の課題を見つけてそれを行政にぶつけること。そして、行政に地域のこともっと真剣に考えさせていくような仕組みをつくる。

地域の5年後、10年後の話ができるような場をどうつくるかが大事。ただし、集落支援員が旗振り役となるのが適切かどうかはわからない。支援員の立場からだと言いづらいし、聞いてもらいにくいうえに気を遣う。住民の意識をどう前向きに変えるかが大事。

地区の仕事・役を引き受けるのも集落支援員の仕事。

集落支援員は、日々の生活を支える役割。地域の方の困りごとを聞いて、調整役となり解決に導くことも集落支援員の仕事と考え、地域から支障木の伐採に関する相談を受けて業者に頼んだり、自分で伐採したり地域の人と一緒に伐採したりもする。

振興協議会で1年に1回でもみんなで集まって地区の将来について話すことが理想。そんなことができるようになったら集落支援員もいらなくなるぐらいだ。

雲南市

市の掲げるミッション

地域内の状況把握・地域内での話し合いや点検、 地域の計画策定や実施の支援

上記を踏まえて支援員ご自身が意識していること

集落支援員の仕事として自分なりに理解しているのは、複数の自治会にまたがる課題解決や、地区の活性化がテーマだということ。

地域に出ていくというよりは組織づくりがミッション。ずっと交流センターにいる人間ではなく、第三者的な立場で動いたり意見を言うことが求められた。

複数の自治会にまたがる課題や、地区の活性化がテーマ。地域がレベルアップすること。

4. 集落支援員のミッション

益田市 市としてのミッション

地域自治組織の設立と定住人口の増加(平成26年度～)

上記を踏まえて支援員ご自身が意識していること

地元の人が地元を好きになってほしいし、誇りも持ってほしい。その上で「じゃあ、どういうまちづくりをしていこうか」という風に持って行きたい。色々な人に、まちづくりに関心を持ってもらえるようにしたい。

美郷町 町としてのミッション

話し合いや連携の促進による地域課題の点検や活動の活性化、行政との繋ぎ役

上記を踏まえて支援員ご自身が意識していること

住民から陳情関係の要望があれば、意見を聞いてまとめ、行政に通してもらおう働きかける。場合によっては署名を集める。通ったものもあれば通らなかったものもある。根回しが大変だが、こういったことも集落支援員の役割。

事務が面倒でやめる自治会も多い国の事業などの事務も担ってきた。連合自治会の事務局という立場であり、必ずしも集落支援員として認識されていないと思う。

海士町 町としてのミッション

支援要望のある地区や緊急度の高い地区に対する人的支援(地域の自主運営能力を高める)

上記を踏まえて支援員ご自身が意識していること

自分たちが目配りというと偉そう。集落を元気にする新しいサポーターと説明していた。

まちの人の「どうしていいかわからない」をプロジェクト化する。つくりたいけどどうしていいかわからないものに対して、目標を明確にしてあげる・仲間を探してあげる・プロセスを分解する、といったことを支援して、小さいプロジェクトでもいいから積み重ねる。そうすれば地域住民の実践力が高まるので、それをたくさん経験することで集落の自主運営能力を高める。

支援員が抜けたとしても地元の人たちだけで盛り上げていけるような活動を心がけている。

「自主運営能力を高める」こと。担当している地区では、これまでに達成できてきつつある。今後、支援地区から外れても地元の人だけで何年も継続的にできたとき、本当の結果が出たと言えると思う。そうはいつでも、ゴールがどこなのかは悩む。実際には担当している地区は高齢化が進んでいて、将来的になくなってしまいかもかもしれない。そこをどうにかしようと思ったら支援地区をいつまでたっても外すことはできない。どこまでを見てあげてどこをゴールとするのかということが難しい。

5. 集落支援員の属性と活動の在り方

支援員になる方は様々なタイプの方がいます。年代や出身地、それまでの仕事の経歴、もともとの地域での役割などの属性ごとに活動の様子が異なってきています。

タイプごとに、どのようなことを活かし、一方でどのような点に気を付けて活動を進めていったらよいか、21人の支援員の皆さんの話から整理しました。

自治会など地域の役をもともと担っていた支援員

役を複数持っているからこそ、あらゆる面から関連して物事を考えることができる。例えば、地区社協の仕事をしていると、高齢者、独居老人なども含めた地域全体のことを把握できる。それは集落支援員の仕事にいきる。(出雲市)

ただでさえ他の役が忙しい中で、集落支援員を頼まれた。支援員として、仕事の幅や考えることが増えてくるので、苦しくなっているのが本音(出雲市)

地域のことがよくわかる。事務局など自治会の役をやりながら集落支援員をするのはいいことだと思う。(美郷町)

色々な仕事があるので、どれが支援員の仕事でどれがほかの役の仕事かわからない。(出雲市)

集落支援員の仕事はどんなものか、自分なりに理解していた。ずっと連合自治会副会長もしていたので振興会の動きも良くわかっており、集落支援員の仕事はどんなことをするのかという想像はついていた。「外」からポツと入ってきたのであれば集落支援員の仕事は何をやっているかわからなかったと思う。ずっと「中」にいたため、地域の様子を知っていた。そして、実際始まってみたら大方想像していた通りの仕事だった。(雲南市)

あまりに多くの役を受けている人は時間的な制約があり最低限やらなければいけない集落支援員の仕事すらできないので、やるべきではない(出雲市)

地域の将来を語るための場をつくるということで「ふるさと談義」という会を行っている。これは、自分がその地区の自治振興協議会の会長をしていたからできることであって、他の地区に行って開催しようと思うと困難。(出雲市)

【考察】

地域の課題や人間関係を把握できており、発言力もあることが大きなメリットです。一方、すでにいろいろな役を持っていて多忙で、忙しさに輪をかけてしまう面も。

5. 集落支援員の属性と活動の在り方

ターンや地区外在住の支援員

違う風を入れるという意味では他地区から来るのもいいと思う(益田市)

1年目は地元の人顔を覚えるのでいっぱいだった。地元の人から、あの時いたよね?と言われても顔と名前が一致しなかった。2年目になると、この人がリーダー的なんだとか、この人とこの人が仲いいんだということがわかり始めたので活動しやすい。(海士町)

地域おこし協力隊は、3年で独立を目指すとか、次のステップのための3年間という位置づけが強いが、集落支援員は3年頑張っただけは...というわけではないので「どうしても海士町に住みたいからそのために今働いている」なのか「集落支援員をすることで地域で活動するスキルを学ぶ」なのか、キャリアとしてその先が見えにくい。結局地域にも合わず都会に戻ったら3年間何をしていたのかわかりづらく、そうなったら転職もできない、という危険性もある。(海士町)

【考察】

新たな視点で地域の課題・魅力を見直せることがメリットですが、地元出身の支援員と比べ、地域の人を覚えるのにまず時間がかかることがデメリットです。また、若いターンの場合、支援員を人生のキャリア形成にどのように位置づけるのかも悩みとなるようです。

地元出身者・Uターンの支援員

わからない人にも出身地区と名前を言ったり、親が喫茶店をやっているのだからその名前を出すと相手にはすぐわかって貰える。話はしやすいので、地元の人との関わりには苦労しなかった。ターン者よりは随分やりやすいと思う。(海士町)

自身が担当地区出身であり、集落支援としてはそこまでやったらやりすぎという部分と、出身者として一緒に楽しみたいという気持ちのはざま非常に悩んだ。集落支援員は何でも屋ではだめで、やりすぎではいけないと思っている。だけど、担当地区出身なので一緒に盛り上げたいし、困っていることがあったら手伝ってあげたいという気持ちがあった。(海士町)

【考察】

親戚や同級生などのつながりで人間関係を構築しやすいことがメリットです。しかし、支援員としてはプレーヤーにならずに1線を引いておく必要がある一方、住民としては深く関わりたい気持ちもあり、その線引きの難しさもあります。また、地元出身といっても、より狭い範囲の単位自治会でみると、出身自治会とそうでない自治会があり、自分の出身の自治会以外での活動はかえってしにくい場合もあるようです。

5. 集落支援員の属性と活動の在り方

若手(20~30代)の支援員

若者だからこそできることがある。地域に入っていくときに「若いもんが頑張っているから」と思ってもらえる。年配の方よりも若い人の方が、色々な事例を調べて「あれもあるしこれもある中でどれにしましょうか」という、支える側の役割として機能しやすい。(海士町)

周りが見えないことは若い人のいいところ。常識を知らないからこそ無謀さ・活力がある。若者と言っても活力が無い人もいますので活力のある若い人には向いていると思う。(海士町)

元役場職員の支援員

役場時代から、仕事で支援地区に出入りすることがあった。当時から世代交代していて知らない人も増えてきているが、家族の話題などが出ると打ち解けやすい。家もだいたいわかっている。(出雲市)

役場にいた関係で事務的なこと・手続き的なことはわかっているので、そういった仕事を集落支援員の仕事としてやっている。ずっとやっていたことの延長なので、大変だと思うことはあまりない。(美郷町)

女性の支援員

女性は、嫁繋がりであったりといとどんどん繋がりが増えていくので、なにかやろうとなった時に女性の方がやりやすい。(雲南市)

女性の意見は柔軟だが、年配の男性にとっては面倒な部分もあるのかもしれない。(雲南市)

元民間企業勤務の支援員

申請書や報告書づくりなど、会社員時代に経験があったので苦にならない。(益田市)

営業職だったので、人と仲良くなるのは得意だった。それが、今の仕事にも生きている。会社組織の中でやってきた経験も、現在組織で動く際に役立っている。(雲南市)

今まで地域では守りの部分ばかり取られてきたので、できることから攻めのことをやっていきたい。(雲南市)

6.地区の課題の発見と解決

支援員の仕事は「地区の課題解決」。とは言っても、そもそもその課題をどのように把握し、把握した課題はどのように解決していけばよいのか、現場では悩みが尽きないところです。21人の支援員の皆さんはどのように進めてきたか、整理しました。

課題の見つけ方

まずは、聞き取りやアンケート等で地元の声を拾うところからスタート。今回聞き取りをさせて頂いた支援員の皆さんは、次のような工夫をしておられました。

○地区計画をつくるために振興協議会で中学生以上の地域住民にアンケートをとって中山間地域研究センターと連携し統計に落とし込んだ。アンケートの項目は、振興協議会のみんなで話し合って考えた。項目決めて意識していたのは、今までしていたこと(守りの面)に加え、攻めの面を盛り込むこと。回収は一戸ずつ出向いて行ったこともあり、8割という高い回収率だった。(雲南市)

○各事業所に出向いてニーズや困りごとを聞き、その中から取り組みがうまれたりした。(雲南市)

○海士町では新しい支援地区が決まったら「集落調査」をする。区長や役員になっている人と一緒に、一軒一軒の家族構成を洗い出し10～30年先に集落がどうなるかの動きをみる。また、集落を周って伝統などを知るためのヒアリングをする。こうして見えてきた課題を区長などと話し合って検討する。そして、どんなテーマで活動するかということを考える。(海士町)

○独居高齢者への聞き取りをした。心配事などを聞いたら、買い物難民などの課題が浮き彫りになった。(出雲市)

○アンケートは、普通世帯ごとにとるが中学生以上の住民それぞれに1部ずつとっている。1世帯に1部ではなく1人に一部。男女や年代によって考え方が違うのに、1世帯に一部にしてしまうと戸主の男性の意見しか聞けない。項目決めについては、先進地に行ってアンケートを見せてもらったり、雲南市や中山間地域研究センターの助言をもらったりした。会合を開いて地区のみんなの意見も聞いた。設問の数が多すぎず少なすぎずになるよう、バランスにも気を付けた。(雲南市)

○飲み会は、住民の本音が聞けるチャンスでとても大事(出雲市)

6.地区の課題の発見と解決

見つけた課題の解決方法

課題

担い手不足

- ・農業をする人の高齢化と後継者不足。
- ・行政等から提案は来るが、それを責任もって実行に移す人がいない。
- ・地域に、人の流れ(外部との交流)が少ない(出雲市)

主産業である農林水産業の低迷と後継者不足(出雲市)

住民に、自治会長などの役を受けられる人が少ない。理由として、高齢の方が多いため決算・会計報告などをパソコンに入力しづらいということがある。(出雲市)

連携不足

各事業体の横の繋がり・連携不足(雲南市)

若い人が活動に参加しにくい

自主組織には若い世代が入りにくい。実際に、草の根的に活動している人、なにかやってみたい人はいる。そういった人が活躍できる場、コミュニケーションを広げていける場が必要(雲南市)

対策

・集落応援隊の受け入れ。「まず受け入れてみよう。そこからの継続についてはやってみてから判断しよう」というスタンスで動いた。受け入れ態勢ができて今年で4年目。年次計画を立て、応援隊にはこれだけやってもらって、自分たちはこれだけやろうと決めている。

・草刈り作業の軽減化を図るため「センチピードグラス」を導入。今年、1700平方メートル撒いた。ゆくゆくは町内に草刈りの軽減化を提案できるようなモデルになっていきたい。こうした新しい提案の支援も仕事だと考える

集落応援隊を受け入れた。それにより、草刈りが進み景観が随分よくなった。生活道路の草刈り、立木の影伐り、ヤマモモ・スモモの草刈り・収穫、など)

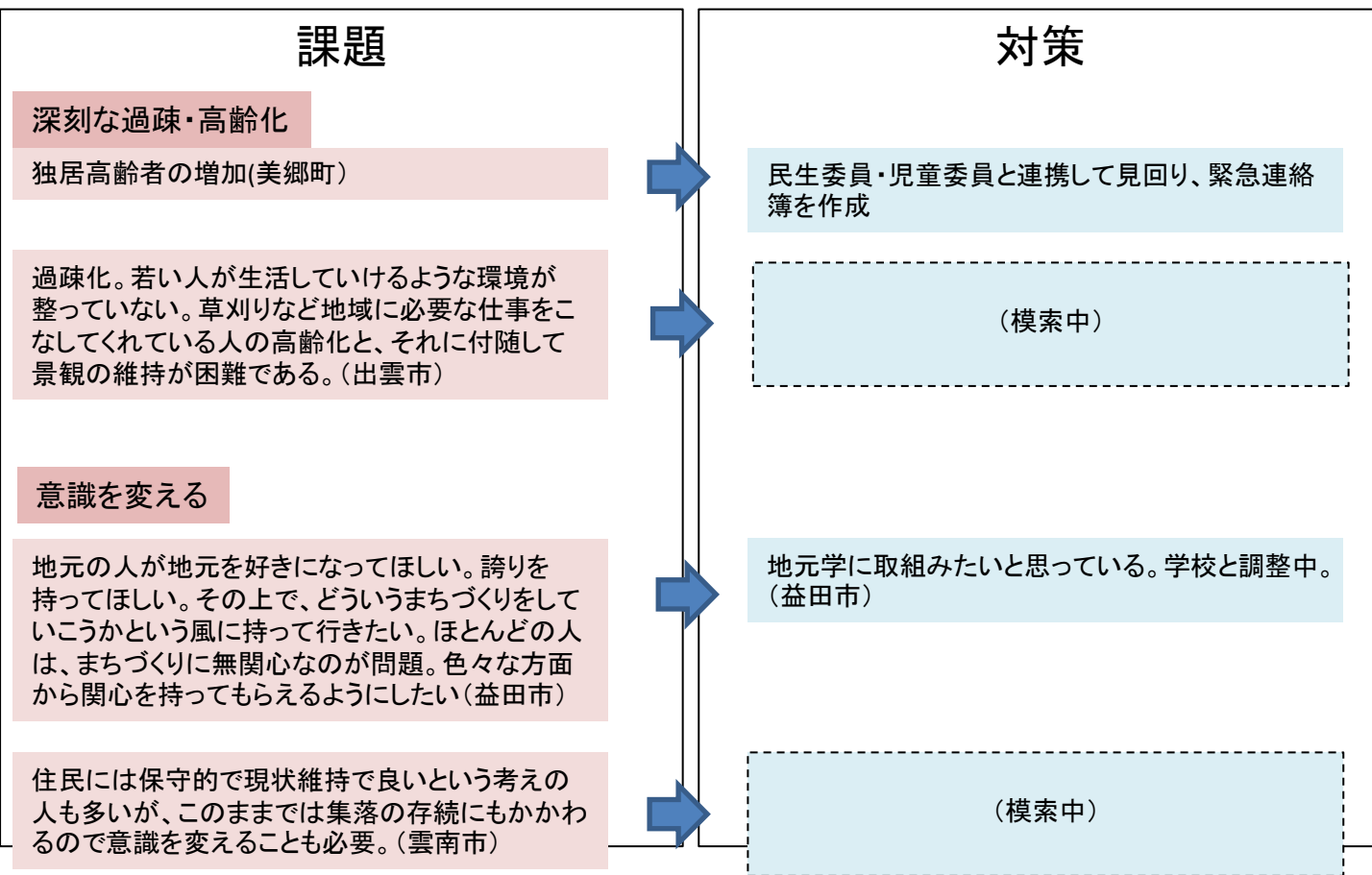
パソコン操作にはある程度慣れているので、代わりにやってあげたり手伝った。結果として、自治会長などを引き受けてもらえるようになった。

地区内の事業所の横のつながりを目的とした協議会を立ち上げ運営。各事業所のイベントを一括して広報する取り組みも行った。平成26年には、各事業所の秋のイベントが載ったパンフレットを作り道の駅など各所に配布。今後、他の季節の実施も含めて継続的に行っていきたい。

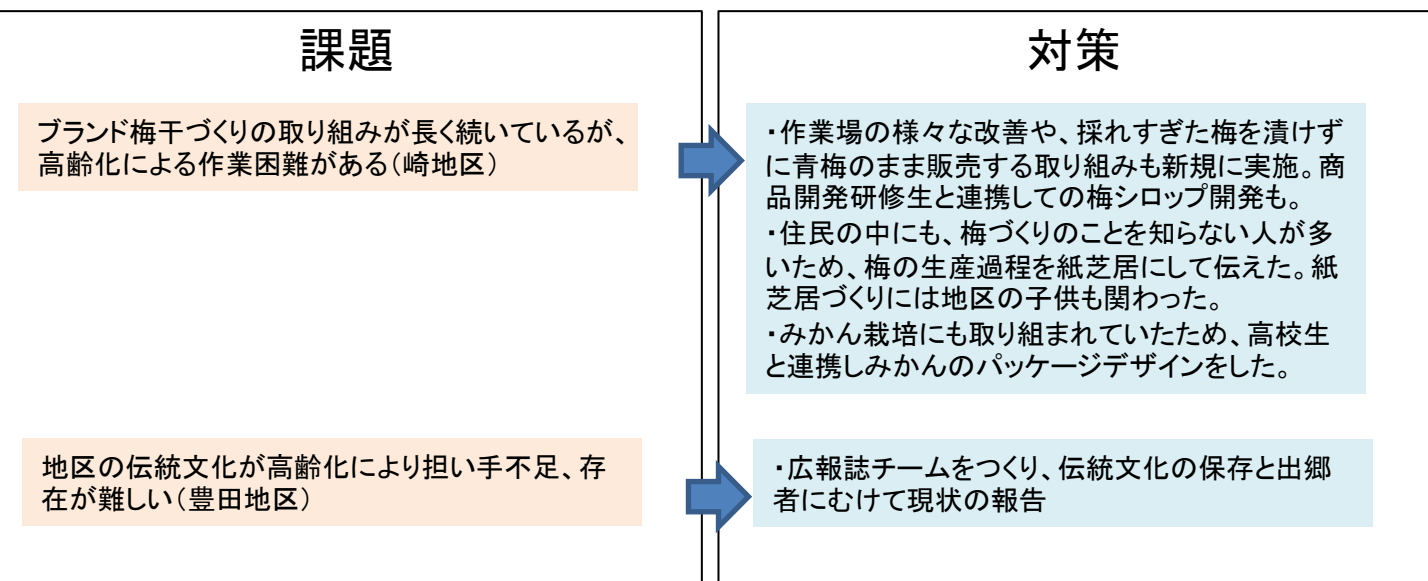
- ・中学校の総合的な学習の時間に、地元企業と連携した商品開発の授業を6時間の枠で行った。

(模索中)

6.地区の課題の発見と解決



見つけた課題の解決方法～海士町の場合～



6.地区の課題の発見と解決

課題

世代間の交流不足(保々見地区)

限界集落において地区の存続の危機(多井地区)

年配者が物の処分に困る一方、ターナー者が引越してくる際に離島なので物が揃えづらい(海士町)

Iターンの若者が多い地区だが、地域住民との関わりが不十分(東地区・北分地区・知々井地区)

買い物支援をしてほしいと要望があった(知々井地区)

対策

・平成23年、町の産業文化祭で高齢の住民による農産物や赤飯の販売。
・平成24年、多世代交流を目的とした大忘年会(男性陣が女性陣など他の住民をもてなす忘年会)。
・平成25年、地区の行事をまとめた手ぬぐいづくりと発表会。住民による、キンニャモニャへの出場。
・平成26年大漁旗ではっぴづくり。

出郷者へ年に一回手紙を郵送し、緩やかな関係を続け、帰郷を促す。

幼稚園跡地を活用して「古道具屋さん」と称し、リサイクル販売。集落支援員が導入された当初は、制度自体がいつまで続くかも不明で、集落支援員の制度がなくなっても地域の活動ができるように、且つ集落支援員の副業の一つになれば自立するための手段になると考えられた。しかし、利益を上げることは難しく、今はどちらかといえば物のリサイクルによる資源の循環とコミュニティ施設として人が交流するきっかけづくりのために運営されている。

「東暮らしの手帳」を製作。防災意識も高い地区なので、炊き出しをしての交流会も実施。

広報誌を製作。住民で広報誌チームをつくり製作。集落支援は1年で終え、今は住民だけで製作している。

「知々井へようこそ」というパンフレットを製作。地図・屋号。避難場所などを記載。

買い物支援を役場と協働し実施し仕組みづくりを行った。翌年にはシルバー人材センターに業務を移行した。

7. 苦勞したことと乗り越え方

支援員の皆さんは、何が「正解」かはっきりとわからない中、試行錯誤をしておられます。乗り越えて来られた苦勞の中には、活動においてのヒントが詰まっているのでご紹介します。

もともとは全体を担当ということで話が来たが、あまり広域的にいっぺんにはできないと感じた。(出雲市)

支援地区を絞った。そもそも、山間部と海岸部の生活面の差が大きかった。祭りの維持や草刈りなどが大変だという声は山間部で大きかったため、山間部中心に支援する方向で考えた。

支援地区はいずれも自身の出身地区ではないため、どう地区に入っていくか迷った。(出雲市)

地区の若手(65歳前後)から6人を選定しプロジェクトチームを発足。これを母体に定例会を開催し、そこでメンバーと相談し活動している。

最初、何をやっていいかわからなかった。(雲南市)

たまたま地域おこし協力隊の人が同じ職場にいたので、協力したり情報交換をしながら進めた。もちろん、交流センターの他の職員にも指示や助言を仰いだ。

お年寄りから活動が認知されなかった。「あなた、何しに来ているの?」と言われることもあり、つらかった。(益田市)

仕事が見えないから、そういうことになる。普段のSNSでの情報発信を見てくれる若い世代からの評判は良かった。どうお年寄りの人にも見てもらうかが鍵。できるだけ地元の人々の写真を多く乗せるなど、興味を持ってもらえるよう工夫しているし、若い人に口コミしてもらうことも大事。

集落支援員の仕事について最初に大まかな説明があったが、あまりピンと来ていなかった。(海士町)

やっていく中でわかっていくしかないと考えていた。ある程度、自分で道をつくっていく必要がある。地区の人の話を聞いて課題を見つけて動いていき、道筋をつくる。

プロジェクトがうまくいかないと感じたときがある。(海士町)

若手など普段関わっている住民と違う層に声掛けをしてみるという方法をとった。

8. 集落支援員の制度設計

21人の集落支援員の皆さんの話から、支援員としての活動の進め方に関わるいくつかのポイントがみえてきました。

支援する地域の範囲

「集落」支援員といっても、「集落」は単位自治会を指すのか、より広域の地域を指すのか、支援対象の地域の範囲も自治体ごとに異なります。海士町以外の4市町では、複数の自治会から成る地域が対象範囲です。ただし、その中で出雲市では、過疎・高齢化の特に進んだ集落に焦点を絞って活動しています。どのような地域の範囲を支援対象とするのかは、後述する「受け皿となる組織の有無」とも関係してきます。

—支援員の声—

「そもそもの地区としての区切りが、たまたま近い場所をくっつけたようになっている。川を挟んで喧嘩していたような地域同士でくっつけられたところもあるし、それぞれにルールも違う。それで、地域で一つの受け皿として頑張れと言われても難しいし、そこで集落支援員としも動きづらい。」(出雲市)
「もともとは全体を担当ということで話が来たが、あまり広域的にいつへんにはできないと感じた。」(出雲市)

支援員と対象地区の関係

支援員は、支援地区に住んでいる方が良いのかどうか。メリット・デメリットそれぞれあるようです。また、地区内に住んでいる、といっても、単位自治会レベルでみるとまた違った面が現れます。自分の住んでいる自治会以外では活動がかえって行にくい場合もあるようです。

—支援員の声—

「住んでいる地区は、毎日帰る場所なので自然と仲良くなっていくが、支援地区はいつもいるわけではないので、話し方や距離の取り方に苦労する。どこまで踏み込んでいいかを考えると難しい。一方で、支援地区と住んでいる地区が一緒だとしたらやりにくかったと思う。結局はその人の人間性によると思うので一概には言えないが。」(海士町)

「プロジェクト自体は閉めの段階であっても、支援員が地域からなかなか引いていけない。支援に終わりが見えないことにみんな悩んでいる。各集落に住みながらその地区を支援するのが一番いいのかもしれない。」(海士町)

「地域の将来を語るための場をつくるということで「ふるさと談義」という会を行っている。正月の行事として、今年で3度目になる。これは、自分がその地区の自治振興協議会の会長をしていたからできることであって、他の地区に行き行って開催しようと思うと困難。」(出雲市)

「支援地区は自分の出身地区ではないためどうやって入っていくか迷った。」(出雲市)

8. 集落支援員の制度設計

受け皿となる組織・支援員の位置づけ

自治体により、支援員が所属する組織がある場合とない場合があります。今回聞き取りをした5市町ではそれぞれ次のようになっています。

- 雲南市⇒地域自主組織に所属し、交流センターに勤務。
- 益田市⇒交流センターに所属・勤務
- 美郷町⇒連合自治会に所属し、一部を除き自宅勤務。
- 出雲市⇒自宅勤務
- 海士町⇒教育委員会に所属・勤務(2名除く)

支援員の声 ～活動拠点があることのメリットについて(雲南市・益田市)～

「交流センターが受け皿となっているため、周りの人に相談できるので非常にやりやすい。1人で悩まなくてもいい。組織の力は大きい。みんなの意見がもらえるのがいい。」(雲南市)

「交流センターという受け皿が合ったおかげで、何をやっていいかわからないということにはなかった。」(雲南市)

「交流センターが受け皿で、そこを拠点に活動している。住民に、自分の立場を正確に伝えようとは思わない。地域に貢献しながら働いている人だという風に思ってもらえればいい。また、交流センターの人と思ってもらえた方が信用もあると思う。」(雲南市)

「住民の顔をどう覚えたかという、自分は普段公民館にいるので、そこに来てくれる人を覚えていった。直接話すか、話さなくてもあとで他の職員から名前を聞くようにしていた。集まりがあった時に顔を出すこともあるが、それは少ない。『お呼びじゃない』と言われたらいやだから。」(益田市)

「支援員という立場で来ていることは、住民にほとんど知られていない。「公民館にいる人」と認識されている。名刺を渡して、肩書について質問されたら答えるけど、普段は言わない。着任時公民館だよりに書いてもらったが「公民館に新しい人が来た」としか思われぬ。もっと制度自体を地域に市がPRする必要がある。一方で、普段は公民館職員的な仕事も多々している。地元の人から公民館職員と認識されていることは別に構わない。怪しまれないというメリットもある。実際には、公民館職員とは仕事の棲み分けはできている。」(益田市)

「公民館によってセンター長の方針、地域性、地区の規模など様々で、それぞれにできることが変わってくるという難しさもある。」(益田市)

支援員の声～組織とは別に活動する支援員の場合～

自治協会の代表者に話がしたいという場合には、コミュニティセンターに依頼して低姿勢でお願いしないとイケない。集落支援員が自治協会の中での位置づけがない。なんで集落支援員にそこまで言われぬとイケないのかという人もいるだろう。集落支援員が自治協会の会議に出ることになっていないので、こちらから頭を下げてお願いしないとイケない。(出雲市)

8.集落支援員の制度設計

情報共有や横の繋がり

多くの支援員から、他地区の事例や支援員の活動のノウハウの研修や、他の支援員との横のつながり作りなどを求める声が聞かれました。また、自身の活動はこれで良いのか、と悩む場面もあり、そのようなときに、外部からの評価があると活動に自信を持って進めるようになります。

—支援員の声—

「他の地区の事例などを教えてほしい。やり方、ノウハウ、成功事例、コツなども共有してほしい。」

「他の集落支援員と繋がりを持ちにくい。もっと横の繋がりをつくりたい。お互いにノウハウの共有をもっとしたい。」(益田市)

「やっていることが集落支援員の活動かと言われたら自信がなかった。そもそも、集落支援員の仕事自体がわからなかったので、合っているかどうかかわからなかった。当時はコンサルタント会社が定期的に来ていたが、1年間の活動内容を伝えたところ「100点です」と言われた。そこではじめて、これでいいんだと思えた。」(海士町)



9.これから支援員になる人へ…

日頃気を付けていることや、これから支援員になる人に伝えたいメッセージをお聞きました。

まず、石を投げる

「まず、石を投げる。そこから何かしらの形で波紋が広がる。黙っておくのが一番楽だが、何か実行しないと何も始まらない。」(美郷)

気長に、焦らず

「道を見失わないようにはしながらも、少しずつ進めていく。寄り道をしていい。人生勉強だと思って気長にやっている。」(雲南市)

「高望みはせず、できるところからやっていく。構想はあっても基本的な所からやっていく必要がある。知恵をみんなを出しながらコツコツやっていくこと。そんなスタンスなら、楽しくやれる。」(雲南市)

「あまり気張らない(これをしなければいけないとなると重荷になる)。少し失敗したからと言って出て行かなくてはいけないわけではないのだから。失敗したら別のことをやればいいというぐらいの気持ちで。」(益田市)

本気で！

「集落支援員は町の人に寄り添い、住民主体の活動をサポートする。住民に高いモチベーションを持ってもらうためにも、支援員が本気でないといけない。それがスマートなやり方なのか不器用なやり方なのかはわからないが、それを一緒にやることで結果がどうあれ地域の方の心に琴線にふれて変わることがある。適当にやっている人たちに一生懸命やってくださる方はいないと思う。本気度が試されています。」(海士町)

「なんでも一生懸命やること。間違っても一生懸命やったら、やっただけの成果は出てくる。」(海士町)

できること、楽しいことから始める

「自分の好きなこと・できることから始めるべき。嫌なことからはじめると気が滅入るし、成果が出しにくいと思う」(益田市)

9.これから支援員になる人へ…

地域の人々の声を聞く、地域の人々の気持ちになる

「住民の気持ちになることが大切。早急に物事を進められない」(出雲市)

「まず、地元の人々の声を聴く。それから、自分の経験しているスキルもうまく出してほしい。支援員がやりたいことも大事なのだが、地元の人たちがやりたいことを把握してから動いてほしい。まずは、地元の人々の想いを大事にして、そこから自分ができることをやってほしい。」(海士町)

「支援する集落のことを、よく知ること。」(美郷町)

行政との関係性

「要件がなくても支所や市役所には出かけてコミュニケーションをとるようにする。」(出雲市)

「行政に対して、サポートを上から目線で期待する姿勢ではなく「がんばっていますので、助けてください」というスタンスで教えを乞う・知恵を拝借するという関わり方をする。」(雲南市)

地区の慣習の見直し

「会議の合理化。会議の議事録などのフォーマットをっかり残している。「固すぎる」とか「そこまでやらなくてもいい」という意見もあるが、自分流でやらしてもらおうと通した。会議では、必ず前月の打ち合わせの確認をしてから今月の議題に移るようにしている。」(美郷町)

「既存の地元のイベントに少しアクセントを加える。」(益田市)

9.これから支援員になる人へ…

住民とのコミュニケーション

「住民から、頭ごなしに意見を否定されても一度は受け入れる。その後、妥協策を提示する。すぐに反論すると逆に反感を買う。受け入れてから話さないと前に進まない。それでも、言っている人と言っていない人もいる。受け入れた後にすぐ意見を伝えるのではなく、少し待ってから言った方がいい人もいれば、向こうから言ってくれるのを待った方がいい人もいる。」(雲南市)

「便利屋にはなりたくない。住民から求められていることだけやっても、自分たちがいなくなった時にそれができなくなるのでは困る。たとえば、根本的な解決に向けたシステムやネットワークづくりをする。自分たちが作業しただけで終わることは極力しない。しかし、地域から求められることは作業が多いので、難しい。なおかつ、お金が儲かるわけではないので人の満足度など目に見えないものを成果にしないといけない。さらに、システムができて、それをいいと思う人もいれば悪いと思う人もいるので、正解がない。(海士町)

「住民の主体性を引き出すため、支援員はなんでも出しゃばらずに「きっかけづくり」に取り組む。支援4年目にもなれば「それはできません」とはっきり言える。ただ、1年目からそれを言うと角が立つと思う。ただ、支援4年目ではあるが、1～3年目の活動のメンバーと4年目の活動のメンバーが全然違う地区もある。その場合、どうしようかと悩んでいる。初めてだからやってあげた方がいいのか、4年目だから地元の人だけでできるように持って行った方がいいのか。」(海士町)

その他

「大学生の受け入れなども行っているが、その場合地域の負担にならないようにしたり大学生をお客様扱いしないことを心がける。」(雲南市)

「よさそうな研修があれば積極的に参加した方がいい。それと、申請書などの事務的な面に手を抜きすぎないように。」(益田市)

集落支援員実践の肝

～第一線で活躍する自治体職員・支援員のための実践事例集～

2015年6月発行

【発行】島根県中山間地域研究センター

【作成】藤田容代

清水隆矢(NPO法人ふるさとつなぎ)²¹